

鏡の中の女は、どことなく煙ったような目をしていた。心のすべて、ではないが、中心に近い一部分をどこかに落としてきてしまったかのようだ。磨きこんだ白い肌に、大きなダイヤモンドのネックレスが光っている。今、女が着ているドレスを作ったのと同じフランス人がデザインしたものだ。ネックレスは、世界にあとふたつだけ同じものがある。ドレスは、この一着きりだ。

ヘアメイクアーティストは、二時間をかけて髪を作った。そのあいだ女がしていたのは週刊誌を読むのとテレビを見ることだった。

まるで違う世界だった。そこにあった世界と女は、九年前までつながっていた。九年間。ほんのわずかだ。そのほんのわずかのあいだに、女はうんと遠い、かけはなれた場所へと移っていた。

十六歳の夏。両親が死んだ夏。あの夏までは、確かに自分は、地球という星の上で生きていた。

今はどこに在るのだろう。半分は凍てついた星。もう半分は熱く焼けただれた星。凍てついているのはひとりである時間のすべてだ。焼けただれているのは、あの男といる時間だ。

愛されている。まちがいない。焼きつくすほど愛されている。だがその愛は、ひとりきりであるときの自分を決して燃やすことはない。男がかたわらからいなくなった瞬間、身も心も、冷えびえとした氷の惑星に自分が立っていることを彼女は思い知らされる。

鏡の中にもうひとりの人物が映った。肩幅の広い、腕の長い男。額の中央から後頭部にかけて、まっ白い帯が髪の中を走っている。

男のタキシードに包まれた腕が、背後から女の肩にのびた。むきだしの白い肩をよぎり、大きくふくらんだ胸にそっと掌をあてた。

「きれいだ。すごい」

ポリリウムをもたせた髪に顔をおしつけ、耳もとで男が囁く。鏡の中の女は一瞬、目を細める。深みのある男の声が、胸よりももっと奥、そして皮膚のすぐ下とつながった官能の糸にさざなみを走らせたのだ。何千本、何万本とある官能の糸。男が一本一本紡ぎ、一本一本、女のからだにはりめぐらせた。九年の時間をかけた。

男はきつと、女よりも女の体を知っている。歓びの与え方、そのはるか先をいく白い閃光の爆発へと導く道、男は指一本で、女の体からすべての力を奪いとる術を知っている。

「今すぐ欲しいよ」

男がさらに囁く。指先が虫のようにくねり、ドレスの深い胸ぐりを這いこむ。それを鏡の中で見ていただけで、固く尖ってしまった乳房に触れる。

膝の裏が小刻みに震える。

「駄目」

「すぐだ、すぐに終る」

「駄目。いつ人がくるかわからない」

「大丈夫。こさせない」

その通りだ。男は王だ。男には小さいが強力な王国がある。

男の片方の腕がドレスの裾のびる。

「やめて……。声がでちゃう」

その言葉に敗北の響きを感じ、男の頬に傲慢な笑みが浮かぶ。すでに男の手は女の中心部にまでのびている。

「鏡をみて。ほら、見てごらん……」

閉じそうになる女の瞳に、男が囁きかける。

「駄目、駄目」

目をあけていられない。熱いうねりの第一波がすぐそこまできている。逃れることはできない。

背後から男が抱きすくめる。

「声が——」

「聞こえやしない。パーティは始まっているんだ」

目が閉じかける、さからうようにみひらくと、男がうしろから女の中に押し入ってくる姿が見え、見えてしまったことうねりが急速に高まってくる。

抗えない。

女は身をまかせ、叫びをあげる。男の動きに体を震わせ、しゃくりあげる。男の熱い愛が自分を貫き、内側から焼き始めるのを感じる。

支配。これは支配なのだ。

歯をくいしばり、目をみひらく。鏡の中の男の目と、目があう。満足そうな表情。

鏡に手をつく。そうでなければ倒れてしまう。掌で男の勝ち誇った笑いを隠す。

男の動きがさらに炎をかきたてる。絶えられなくなり悲鳴がもれる。灼熱の星に身をおく一瞬。

だが鏡の中の女とちがいが、そこにいる女の心のどこか冷めていく。

支配から逃れること。男の王国を捨て、どこかへでいく。水でも炎でもない、まったく別の星で暮らすこと。

裏切り。王国を捨てるのは裏切り。

叫び声はさらに高くなる。第二波、第三波のうねりが待ちかまえている。

男の動きも激しくなる。ひと房の白髪は、額に落ちかけている。

ひと房の白髪、それは男が王国を築きあげる過程で負った名誉の傷の証だ。斧で額を叩き割った者がいた。

男が熱い溶岩を注ぎこむ瞬間、女は決心する。なぜなら、落としてきた心の一部分が氷の星にまだあったからだ。

救いを求めている。逃れたいと叫んでいる。むりにあの心の一部分を、欠けた穴に押しこもうとしても軋みがおこるだけ。

女は決心し、再び鏡の中の自分を見る。

死とひきかえでも。

この王国を捨てる。

2

その男は目を閉じ、喘いでいた。半ば開いた口に強く右拳を押しあてている。そうでもない声がかぼれてしまいそうだ。小便の匂いのするビルとビルのすきまに身を小さくしてねじこませ、できればこのまま闇の中に溶けてしまいたいと願っていた。

最悪だ、最悪だ、最悪だ。さつきから同じ言葉ばかりが頭の中を駆けめぐっている。

早く効け、効くんだ、泣きそうになって自分にいい聞かせる。奴らに見つかる前に飲んだ、あの白い顆粒。「アフター・バーナー」だ。早く俺の尻から炎を噴きだせ。マッハのスピードになって、奴らをぶつちぎれ。

震えている。止まれ、止まれ、止ま——。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。